すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2024.12
243号

■特集／ふれあいの農泊・民泊

●いま、グループネット／朝熊山麓に花を咲かす会　●みえを歩こう／菰野町 湯の山温泉街界隈

特集

ふれあいの農泊・民泊

農泊とは、「農山漁村滞在型旅行」のことで、旅行者は、滞在中に豊かな地域資源を活用した食事や体験などを楽しむことができます。近年、三重県内ではこうした農泊施設に加えて、空き家などを活用して宿泊サービスを提供する民泊施設も増え、急増する訪日外国人観光客などを受け入れています。

今回は、県内の農泊・民泊施設の中から6施設をご紹介します。

＊各施設の営業日時・料金・予約方法や受け入れ人数などには違いがあり、状況に応じて延期や休業する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文…中村 真由美・中村 元美
堀口 裕世
撮影……梅川 紀彦・尾之内 孝昭
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

「古木のある家」の小高 尚代さん

クロガネモチの大木が見守る、おもてなしの宿

古木のある家

【いなべ市北勢町】

民泊「古木のある家」の目印は、クロガネモチの大木です。「樹齢はわかりませんが、義父が子どものころには、既に見上げるほどの高さだったようです」と教えてくれるのは、小高（こだか）尚代（ひさよ）さん。小高さんが国内外からの旅人を受け入れる民泊を始めたのは令和元年のこと。そのきっかけについて伺うと、「8年間空き家だった義父の実家を何とか活用できないかと思って」と、熱い想いを語ってくれました。

昭和初期に建てられたという宿は、広い土間、剝（む）き出しの太い梁（はり）、職人手作りの建具にいたるまで、大切に受け継がれてきたことがわかります。加えて、さりげなく置かれた「ようこそ○○様」と書かれた黒板や、まねき猫の置物などから、おもてなしの心が伝わります。そこには、結婚前にバックパッカーを体験したことが原動力になっているといいます。「たとえばインドでは、列車が7時間遅れても誰も文句いわないし、価値観が違っていてもいいんだと実感できて、本当に楽しかったんです。だから、今度は『あぁ、ここに来てよかった』と思ってもらえれば、それだけで嬉しいですね」と、輝くような笑顔で話してくれました。

滞在客の半数は外国人観光客で、滞在中の過ごし方として好評なのは、市の特産品の蕎麦を使用した、坂口和也先生による蕎麦打ち体験とのこと。体験者は、坂口先生の心のこもった教え方に感動するのだといいます。最近では、いなべ市観光協会が運営する、電動アシスト付きレンタル自転車「いなチャリ」を利用して市内をのんびり巡るという体験を紹介する機会も増えたといいます。市内の自然の風景、人気飲食店でのランチ、風を感じながらのおしゃべりが楽しめると好評です。

「古木のある家」に滞在すれば、いなべ市の魅力を五感で味わうことができるでしょう。

お問い合わせ

「古木のある家」
TEL 080-5317-8400

クロガネモチ

「古木のある家」外観

滞在客を温かくもてなす部屋

蕎麦打ち体験※

「いなチャリ」※

※印の写真は取材先から提供していただきました

「田舎の当たり前」に価値を見いだし、ワクワク体験を発信

地元農家夫婦が暮らす田舎の家

（「株式会社 七転八倒」）

【伊賀市川北・広瀬】

福持 久郎さん（左側）と加代子さん

昨年3月、「ディスカバー農山漁村の宝」第10回選定で、伊賀市の「株式会社七転八倒」が、特別賞の「新価値創出賞」を受賞しました。「ディスカバー農山漁村の宝」とは、農山漁村の地域資源を引き出すことにより、地域の活性化や所得向上に取り組んでいる優良な事例を選定するというもので、農林水産省が主催しています。「株式会社 七転八倒」の主な活動場所は、里山の風景が続く伊賀市川北・広瀬地域です。稲穂が頭を垂れるころ、活動拠点として令和3年にオープンした「古民家カフェ365nichi」を訪ねると、代表の福持 久郎さんと奥様の加代子さん、副代表の大地 真理子さんが温かく迎えてくれました。

大地 真理子さん

「会社を設立したのは、平成30（2018）年です。このままでは地域が疲弊してしまうと、危機感を覚えた仲間6人で始めました」と福持さん。6人の中には県外からの移住者もいて、結婚を機に千葉県から移り住んだ大地さんもその一人。当初は戸惑うこともあったものの、地域の人々と話し合う中で、多くの発見があったといいます。「たとえば、昔ながらの結婚式について話を聞くと、花嫁行列の際に南天の赤い実と大豆をまく風習があることを知りました。〝難を転じて、豆に暮らす〟という想いが込められていて、素敵ですよね」と話してくれました。こうして「田舎の当たり前」に価値を見いだした皆さんは、地域の人々にも参加してもらって昔の結婚式を再現するなど、一緒になって活動することをモットーにしていると伺いました。

農業、林業や狩猟など、さまざまなジャンルのプロが集まった同社の活動は幅広く、古民家カフェ運営に加えて、「田舎の結婚式」「田んぼCAMP」「チェーンソーの講習・体験」などのプログラムの提供、無人野菜販売所の設置など、多岐にわたります。その中で、令和元年に始めたのが、福持さん夫婦の住居の一部を利用した農泊です。

農泊「地元農家夫婦が暮らす田舎の家」は、築90年の風格漂うたたずまい。広い畳敷きの部屋は、手毬や吊るし飾りで彩られていました。「手毬は娘が、吊るし飾りは私が作りました」と加代子さん。藤の花のような可憐な飾りを見ていると、滞在客に喜んでもらおうと、心を込めて作っている様子が目に浮かぶようです。

これまでに受け入れた滞在客の中で、海外からの観光客は、トルコやオーストリア、シンガポールなど。畳の部屋で布団を敷いて寝ることや、野菜収穫体験で大きな大根を引き抜いたり、冬至の日に柚子風呂に入るなど、田舎では当たり前のことで喜んでもらえるのが新鮮だと、話してくれました。

会社を始めた当初は、周囲から「勝手にやれ」などと好意的ではない意見もあったといいますが、「たとえ8回失敗しても、9回目で立ち上がろうという意気込みで続けてきました」と福持さん。「株式会社 七転八倒」の挑戦は、今後も続くことでしょう。

お問い合わせ

「地元農家夫婦が暮らす田舎の家」
TEL 090-7850-0921
「株式会社 七転八倒」
TEL 070-4497-4660

「古民家カフェ365nichi」

「地元農家夫婦が暮らす田舎の家」外観

手作りの手毬や吊るし飾りなどで彩られた部屋

刈り取った稲の稲架（はさ）掛け体験 ※

ユニークな文字が目を引く無人野菜販売所

※印の写真は取材先から提供していただきました

故郷の古民家でフィリピン・イロンゴの文化を

多文化体験宿 ゲストハウスイロンゴ

【津市白山町】

ドイツ・フランクフルトから来た学生たちは古いかまどでの料理に初挑戦

白山町佐田にある「多文化体験宿 ゲストハウスイロンゴ」を訪れると、現れたのはゴルフに来たという韓国人の男性グループと、高校から大学へのギャップイヤーを利用し、ファームステイをして働きながら旅をするドイツ人の若者たち。昔懐かしい日本の古民家は、まさに多文化共生の場となっていました。

ここを経営するのは、京都大学・大学院で森林について学び、フィリピンで環境に関するNPO活動をした倉田 麻里さんと、夫のフランシスコ ハロルドさん。ハロルドさんはフィリピンのネグロス島の出身です。麻里さんが暮らしたのも同じネグロス島。「この島がある西ネグロス州やイロイロ州、コタバト州などの人や文化を〝イロンゴ〟といいます。イロンゴの人々が使うイロンゴ語は歌うようにやさしい話し方で、イロンゴの料理はとてもおいしくてバリエーションが豊富です。ハロルドも料理が上手ですよ」と麻里さん。平成29(2017)年に帰国し、2年後、二人で「イロンゴの文化を広めたい」と麻里さんの生まれ育った家と祖父の住んでいた古民家で、農業の傍らゲストハウスを開きました。日本の農村が持つ資源とフィリピンの文化を融合することで地域の活性化をめざしたいという夫妻。旧村役場の建物でシェアスペース「ハッレ倭(やまと)」を開くなど、多彩な活動を展開しています。

倉田 麻里さんとフランシスコ ハロルドさん

自宅の玄関周りには珍しいフィリピンの野菜が並べられ、昔ながらの土間の台所にはどっしりと大きなかまどが存在感を示して、日本とフィリピンの文化が違和感なく共存しています。ご近所の方たちとも親密で「かまどの薪をもらったりしています。白山町は人が優しくて良いところです」と、夫妻が持つ二つの故郷への愛が生んだゲストハウスなのです。現在は、夫妻と小学生の侑実(ゆうみ)さん、侑治(ゆうじ)さん姉弟の4人家族。ハロルドさんは会社員でもあり、八面六臂(はちめんろっぴ)の毎日を過ごす夫妻ですが、多忙ながらのびやかな暮らしぶりを感じます。

ここでは、宿泊のほか、農作業や狩猟などの体験や野菜の購入も可能です。人気なのは、ハロルドさんのイロンゴ料理教室。豚肉と鶏肉を煮込む「アドボ」、タマリンドで酸味を加えたスープ「シニガン」など食べてみたいメニューがたくさん並びます。「体験は日帰りでもできます。かまどを使って料理をするのが初めてという方も多く、楽しんでもらっています。また、ペット同伴も歓迎です」。さまざまな心の垣根をさっと取り払ってくれそうな宿です。

お問い合わせ

「多文化体験宿 ゲストハウスイロンゴ」
TEL 090-4415-4042
(倉田 麻里さん)

手作りの看板がお出迎え

フィリピン料理に使う野菜も栽培

畑で収穫を体験

老若男女多国籍※

かまどで炊いたご飯は格別の味※

※印の写真は取材先から提供していただきました

水田の風景にアンティークが似合う一棟貸し
六月農園 hanare 6tsuki
【多気郡明和町】

アンティークの素材を活かした室内

「六月農園」は、明和町の田園風景の中にあります。一棟貸しの「hanare 6tsuki」は、白い壁にアンティークのドアが似合うおしゃれな空間。窓からはミカンなどの果樹越しに、はるかに水田が連なる風景が見えます。「お客さまは若い日本人女性のグループが多いですね。海外の方は、窓の外に椅子を置いて〝水田浴〟をしたり、アマガエルがかわいいと感動したり、予想外の反応があって楽しいです」と言うのは、この農園を営む西川利道さん。

西川 利道さん

「県内の職人さんに、なるだけ地元の材料を活用して造ってもらいました」という〝hanare〟。もみ殻を混ぜて塗った床や古い藍床のふたを利用したテーブルなど、地元の自然や歴史をさりげなく取り入れています。

「一棟をお貸しする形で、宿泊のほか農作業などが体験できます。キッチンもありますので、農園の無農薬野菜や松阪肉など地元ならではの食材を使って自炊もできます。近くにある懐石フレンチ『restaurant Ryu』さんでディナーを楽しみ、翌朝、ここへシェフが朝食を作りに来てくれるというオプションも人気があります」。優しく音が広がる木のスピーカーとレコードプレーヤー、薪ストーブなどが目を惹く室内。「レコードをかけたり、薪をくべてストーブに火をつけたり、ちょっと手間のかかる非日常の作業も楽しんでいただきたいと思っています」。

兵庫県の尼崎市で育ち、大学卒業後は会社員として都会生活になじんでいた西川さん。西宮市の大学に通学していたときには阪神淡路大震災、転勤した東京では東日本大震災に遭遇。「東京ではお台場から出られず帰宅難民になってしまったのです。それをきっかけに、都会で暮らす必要があるだろうかと考えはじめました」。その気持ちに、やはり都会育ちの妻・知鈴子さんも「田舎暮らしにあこがれていた」と賛同。「父の実家であるこの地で、農業に挑戦したのです。祖父の家ですから夏休みに来るぐらいで故郷という意識ではなかったのですが、子どもを育てるにもいい場所だと思いました」。

平成26(2014)年から農園をはじめ、4年後に「hanare 6tsuki」を開業。センスの良さをいかし、地元の人たちの協力も得て、昔っぽさとおしゃれさが共存する居心地の良い空間を作りました。

「六月農園」の名は、第1次産業である農業に加工やサービスを加えた〝6次産業〟をめざすことと、農にゆかりの深い〝月〟からの命名ですが、「6月生まれでもあります」とにっこり。「ご自身の家の離れのように、くつろいでいただきたいです」。ゆったりと過ごす時を楽しむ、大人の遊び心を満たしてくれる農泊です。

お問い合わせ
「六月農園」
TEL 0596-63-6023

レコードプレーヤーのあるコーナー

水田側から見た外観

不思議な木製スピーカーから音が広がる

薪ストーブは料理にも使える※

畑仕事もエンジョイ※

野菜は無農薬の有機栽培

※印の写真は取材先から提供していただきました

健康志向のマクロビオティック料理で体調改善

農家民宿まはな

【志摩市阿児町】

道沿いの看板の前で大西 きみこさん

内海の波静かな英虞湾に近く、伊勢志摩国立公園の緑に囲まれた「農家民宿まはな」は、志摩市阿児町立神の静寂の地にあり、ときおり聞こえるのは漁師さんが走らせる車の音。平成23(2011)年に大西 せつをさん、きみこさん夫婦が、空き家を宿としてオープンさせました。食事療法の一種であるマクロビオティック料理が、健康志向の人々に喜ばれ、ヴィーガンやベジタリアン、療養食にも対応し、北海道から沖縄までと全国各地から、志摩の地に訪れています。また日帰りでの食事利用もできるとのことで、何度も通う固定ファンがいるようです。

きみこさんは元看護師。甘いものが大好きだったようですが、健康診断で国の指定疾患が見つかったことにより、体調不良に悩まされる日々が始まりました。それまでの食事を見直し、マクロビオティック生活をはじめます。「マクロビオティックとは穀物や野菜、海藻などを中心とする日本の伝統食をベースとした食事を摂ることにより、自然と調和しながら、体を整えて、健康な暮らしを実現する考え方です」ときみこさんは基本的な知識を学び、料理指導を受け、インストラクターになり、そのころには、病気も克服していました。

基本は一汁三菜の料理で、お膳にはくるみの芽やよもぎ、菜の花など、その季節に採れるものがふんだんに並びます。豆乳プリンやフルーツロールクッキーなど工夫したスイーツもあり、梅干しや味噌、みりんなどの調味料もきみこさんの手作りで、優しい味わい。また、クミンやターメリックなどのスパイスがたっぷり入ったインド仕込みのカレーも人気のようです。

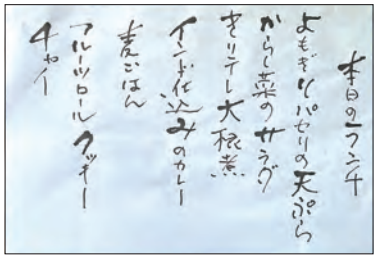
より体調を改善したい人には「まはな七号食コース」を勧めています。七号食とはマクロビオティックの創始者が提唱した、精製していない穀物を食べる食事法です。玄米とごま塩、梅干しのみのシンプルな食事で、一口を50~200回、入念に噛んで食べます。「現代人は噛むことを忘れてしまっています。噛まなければ空回りの食事でしかありません。噛んでこそ体にいいものを取り入れることができます。このコースを終えて自宅に戻った後に、さまざまなものを口にすることになるでしょうけれど、噛むことだけは忘れないで」ときみこさんは力説します。ごま塩はきみこさんの指導により、ごまをゆっくりとすり潰し、1時間かけて自分たちで作ります。「おかずは一切なし、飲物は水とお茶のみです。ストイックな食事法ではありますが、自然と心と体が癒やされていきます。効果がみられるのは人によって違いますが、最低3日、できれば1週間から10日ほど試してほしいですね。過去にはむくみやアトピーの症状に変化が出た人たちもいました」。食事の時間以外は、「まはな」周辺を散策したり、近くの藍染め作家さんのところで作業を手伝ったり、のんびりと過ごして、心身ともにリラックスします。

客室には、「まはな」や志摩の風景を描いたアーティストブックや木工、竹のクラフトが置かれています。これらは2年前に他界したご主人のせつをさんが、手がけたもの。二人のもてなしの想いが詰まった宿です。

お問い合わせ

「農家民宿まはな」
TEL 0599-45-4195

緑の中に建つ一軒家



手書きのメニュー表

体調を整える七号食※

「まはな」の庭で餅つき※

アーティストブック

※印の写真は取材先から提供していただきました

豊かな自然に囲まれた昔ながらの暮らし体験

ゲストハウス尾呂志庵

【御浜町上野】

囲炉裏のあるリビングの奥に12畳の和室

周囲を山に囲まれた、御浜町の尾呂志地区は米どころ。集落に熊野古道が通り、棚田が広がるのどかな光景の中に「ゲストハウス尾呂志庵」があります。古民家風の落ち着いた建物で、中に入ると天井は高く、立派な梁が剥き出しで、自ずと開放的な気分になれます。

一日一組限定の宿は、平成19(2007)年に建てられた別宅。「家の持ち主は大阪府枚方にお住まいで、熊野の知り合いと集まる時にここを使っていたようですが、体調を崩されたことから、譲っていただけることになり、72歳からゲストハウスを始めました」と、オーナーの松井 岱さん。松井さんは東京での介護関連の仕事を退職後、知人を訪ねて和歌山県田辺市本宮町に移住し、尾呂志にやってきて6年が経ちました。

広々とした室内は、囲炉裏とキッチンを備えたリビングスペースと、その横に12畳の和室、階段を上がれば10畳のロフトになってます。基本は素泊まりですが、ここは体験型のゲストハウス。かまどでご飯を炊くこともできます。自分で火を起こして羽釜で炊いたご飯は格別の味わいで、囲炉裏で鮎を炭火で焼けば、いい香りが漂います。広い縁側から望む庭では、バーベキューも楽しめます。

お風呂にはシャワーも付いていて快適ですが、五右衛門風呂として薪を焚けば、体の芯まで温まり、湯冷めしにくいと好評です。「フェイスブックで『薪が欲しい』ってコメントを出すと、届けてくれる人もいて助かっています」と松井さん。地域の人の輪も広がっています。

松井 岱さん

松井さんは自家製の玄米麹で味噌を仕込んだり、梅干しを毎年100キロ近く漬け込んだり、手間暇をかけた暮らしを実践しています。また、ビワ、クワ、カキの葉、よもぎやどくだみなど、近くで採れるもので野草茶を作り、摘果したみかんは酵素ジュースに、塩もお手製です。「尾鷲の海洋深層水を汲んできて、蒸発させてから土鍋でぐつぐつ炊くんです。30リットルで1キロできましたよ。知り合いは鮎捕りの名人で川の恵みをいただき、猟師さんから鹿肉をわけてもらって燻製にしたり、こちらへ来てから食事も変わりましたね。御浜町にはわたしのような移住者も多くて、そんな仲間と無農薬で田んぼにも挑戦していますが、イノシシも来るから大変ですよ」と、尾呂志での生活を満喫する松井さん。

田舎の親戚の家に来たかのような雰囲気に浸り、丁寧な暮らしを体験し、のんびりと過ごすのにぴったりな宿。海外からの申し込みもあり、松井さんはアプリを使って対応しています。

また地元の小説家による朗読会や劇団四季に所属していた友人のコンサートをしたり、宿泊客だけでなく、地域の人の交流の場にもなっています。

熊野古道の風伝峠登り口までは徒歩15分程度、日帰り入浴ができる温泉施設「入鹿温泉 瀞流荘」や源泉かけ流しの「湯ノ口温泉」も車で20分程でアクセスできます。秋から冬の朝の時間に現れる「風伝凪」は、この辺りの風物詩。尾呂志の豊かな自然に囲まれて、昔ながらの暮らし体験を楽しんでみてはいかがでしょうか。

お問い合わせ

「ゲストハウス尾呂志庵」
TEL 090-5414-2079
(松井 岱さん)

落ち着きのある外観

かまどで炊くご飯※

友人がラベルを描く野草茶

近くの畑を耕す松井さん※

※印の写真は取材先から提供していただきました

NPO 朝熊山麓に花を咲かす会

伊勢市の県営サンアリーナ入口にある「花の広場」は、「NPO朝熊山麓に花を咲かす会」のメンバーが20年以上前からボランティアで管理する無料の花畑です。春になると、ピンクのグラデーションが圧巻の花桃をはじめ、菜の花や紫色のショカッサイ、ユキヤナギに青と白の小さなネモフィラが咲き誇り、一年で最も色鮮やかな季節を迎えます。

代表　岩﨑 理(ただし)さん

お問い合わせ

「NPO
朝熊山麓に花を咲かす会」
伊勢市浦口2-8-18
TEL 0596-24-1790

朝熊山を背景に、駐車場を完備する県営サンアリーナの一角に広がる「花の広場」は来場者を笑顔にする憩いのスポット。伊勢二見鳥羽ラインの朝熊東ICからすぐとアクセスもよく、周辺には遊具や芝生広場のある朝熊山麓公園、サッカー場の設備も整い、美しい花の彩りを求めて多くの人が訪れます。花を管理する「NPO朝熊山麓に花を咲かす会」では、この景色を後世に引き継いでいきたいと、7人の仲間で一年を通じて活動を行っています。代表の岩﨑 理さんにお話を伺いました。

――活動のきっかけを教えてください。

岩﨑…賑わいのある元気な伊勢のまちづくりに貢献したいと、平成16(2004)年3月3日の桃の節句に会を発足しました。元々は「まつり博三重'94」で花の広場として公開されていた場所だったのですが、その後しばらく放置されていたので、当時はススキや背丈以上の雑草が生えている状態でした。まずは花畑の開墾から。草を刈って、土に混じっている石を取り除いてから耕しましたが、土建業の知り合いや農家の方、かつての同僚も含め、100人近い人たちが手伝いに来て、助けてくれました。種まきも同時に進めて、なんとか一年目にコスモスを咲かせることができました。

――春といえば桜や梅を思い浮かべますが、こちらでは花桃。伊勢の名所の一つになりましたね。

岩﨑…花桃で知られる南信州の昼神温泉や月川温泉周辺を視察に行きましたが、開花時期には花まつりも開いてたくさんの人で賑わっていましたね。「日本一は無理としても、西日本一をめざしていこう」と、平成20(2008)年から花桃を植え始め、今では3000本になりました。サンアリーナ企業団地にも広げて、また朝熊山麓公園やサッカー場の前にも植えました。

花の管理は雑草との戦い

近くの朝熊山麓公園

――花桃は一色ではなく、赤、ピンクに白と、3色のグラデーションが圧巻ですね。春以外の楽しみを教えてください。

岩﨑…夏のあいだは、オレンジ色のキバナコスモスを中心に、紫色のサルビアと黄色のメランポジウムの花の種を5月から6月に蒔いています。長く花を楽しんでもらえるよう、時期をずらして工夫しています。5千平方メートルある広場のうち、2千平方メートルの花畑に、4万株を咲かせました。

――花を咲かせる苦労はなんでしょうか。

岩﨑…温暖化でなかなか寒くならないので、当初植えていたコスモスやマリーゴールドは止めました。花期がずれてしまい、春に咲く花の植え付けができなくなってしまったのです。また水やりが少なくてもいい種類の花を選んで、花期の長いものを植えています。伊勢市役所や社会福祉協議会に種の購入を助けてもらっていますが、より多くの花を咲かせたいので、種採りもしています。

結成当初は50人ほどいたメンバーも、暑い中、それに寒い中での作業は体に応えますから、段々と減っていきました。それでも新たに手伝ってくれる人もいて、現在は男性3人、女性4人で活動中。平均年齢73歳です。草刈りや杭打ち、肥料まきと、花の生長に合わせて作業は皆で分担していますが、私自身は年間150日ほどこちらで作業しています。たくさんの人に見にきてもらうことが、活動の励みになっています。一緒に花を咲かせてくれる仲間を募集しています。

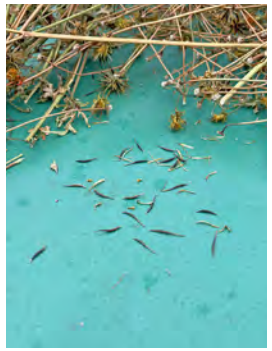
――誰でも自由に散策できる「花の広場」は、入園無料ですが、ボランティアでの花畑の運営には費用がかかるため、募金箱を設けました。後世に残せる花の名所を、と、雨の日も風の日も、花の生長を見守り、地域の人たちに潤いある空間を提供しています。

インタビュー…中村 元美

可憐な夏の彩り

春の花桃の景色※

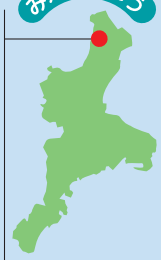
設置された募金箱



種を採る作業

※印の写真は取材先から提供していただきました

みえを歩こう



「湯の山温泉 歴史こばなしの道」散策

菰野町 湯の山温泉街界隈

御在所山の麓に湧き出る湯の山温泉の歴史は1300年前にまで遡るといわれます。長い歴史の間には、多くの文化人や名士たちも来遊し、紀行文や小説、短歌など、優れた文学作品が誕生しました。

現在、湯の山温泉街をそぞろ歩けば、ところどころで文学碑と傍らに設置された自然石の石盤を見かけるでしょう。石盤は菰野町が設置したもので、これらをたどる「湯の山温泉 歴史こばなしの道」も設定されています。

今回は「湯の山温泉 歴史こばなしの道」を軸として数か所をご紹介します。時には温泉街に秘められた物語に耳を傾けてみてはいかがでしょう。

取材・文…中村 真由美

今回、お話を伺ったのは「菰野町図書館」郷土資料コーナーの学芸員・西山 祐実(ゆみ)さんと宇佐美 正文さんです。

■ 行程図　所要時間／約2時間 ※所要時間は、おおよその目安です。

START 御在所ロープウエイ「湯の山温泉」駅 → 約200m → 「鈴木小舟の歌碑」 → 約200m → 「阪正臣の歌碑」・蒼滝橋 → 約450m → 「大石公園」 → 約150m → 「佐佐木信綱の歌碑」 → 約700m → 御在所ロープウエイ「湯の山温泉」駅

宮廷歌人、鈴木 小舟(1857~1923)

今回の散策は、御在所ロープウエイ「湯の山温泉」駅の駐車場(有料)に車を停めてスタートします。なお、4月1日から11月30日までの期間は、近鉄「湯の山温泉」駅から三重交通バスが運行しています。公共交通機関を利用の場合は、事前に運行状況や時刻表などを確認する事をおすすめします。

御在所ロープウエイ「湯の山温泉」駅を後にして、最初に向かうのは「鈴木小舟の歌碑」です。ロープウエイ乗り場前から続く細い階段を足元に気を付けながら下りていくと、三滝川に架かる涙橋が見えてきました。歌碑は橋の近くに建ち、「世の中の 春にはあそび あきにけり いさ鶯と 山こもりせむ」と流麗な文字が刻まれています。この歌は、家庭の不幸や自身の病が続いた小舟が、湯の山で一人静かに過ごしていたころの作品。明治 29(1896)年に伊勢神宮を参拝された皇后の目に留まったことが縁で、御歌道御用皇后宮職御雇に抜擢。つまり、宮廷歌人になったのです。

蒼滝橋と定五郎

今も郷土の誇りとして慕われる小舟の歌碑に別れを告げて涙橋を渡ります。西へ向けて歩くと、やがて旅館「寿亭」に到着。〝小説の神様〟と称された志賀 直哉など、多くの文化人や名士たちが逗留したことでも知られる同旅館には、数々の見どころがありますが、見逃せないのが、玄関へと続く石段に嵌め込まれた

御在所ロープウエイ「湯の山温泉」駅

「鈴木小舟の歌碑」

「阪正臣の歌碑」

令和6年に架け替えられた蒼滝橋

「阪正臣の歌碑」と、三滝川に架かる蒼滝橋です。

阪 正臣（1855～1931）は、名古屋出身の宮廷歌人。歌碑には「こものやま いつこをみるも あかされと すぐれくるなは これのにひむろ」と記されています。同歌は昭和5（1930）年に行われた、「鈴木小舟の歌碑」の除幕式に参列した阪 正臣が、「寿亭」の別館「水雲閣」（国登録有形文化財）から見た景色を詠んだものといわれます。なお、新室とは新築の部屋のことで、前年に竣工したばかりの「水雲閣」を指しています。

一方、蒼滝橋は令和6年に架け替えられたばかりですが、以前の橋は、湯の山では初のコンクリート橋として昭和8（1933）年に架けられました。小さな橋でしたが、そこには、ある人物の物語が秘められているのです。定五郎です。「寿亭」の風呂番として陰日向なくよく働いたため、旅館の主人や地域の人々からも愛され、大番頭は、従業員たちに「定五郎を見習え」というほどでした。そんな定五郎が病で亡くなった時に遺されていたお金を元にして架けられたのが、以前の蒼滝橋なのです。令和5年、菰野町商工会青年部が企画した「こもの昔ばなし絵本製作贈呈事業」の一環として、絵本『ゆのやまのさだごろうばし』が完成しました。西山さんに見せてもらうと、菰野中学校美術部の部員たちが心を込めて描いた絵が、正直で働き者だった定五郎の姿を浮き彫りにしていました。

『ゆのやまのさだごろうばし』

湯の山を愛した人々

湯の山の人々が今も〝定五郎橋〟と呼び親しむ蒼滝橋から、次にめざすのは「大石公園」と「佐佐木信綱の歌碑」です。

「大石公園」

温泉街を縫うように流れる三滝川では、大小さまざまな石が見られますが、〝大石〟と呼ばれる石はひときわ大きく、重さは推定800トンといわれます。周囲は「大石公園」として整備され、赤い高欄の大石橋が彩りを添えています。この橋は、昭和12（1937）年に完成しましたが、工事の費用を寄付したのが、名古屋出身の小菅 剣之助（1867～1944）です。四日市市の港湾整備や工業発展などにも尽力した実業家で、晩年は湯の山を度々訪れ、景勝保存に興味を持っていたといいます。そんな中、木造だった大石橋が通行に危険だと知り、寄付を申し出たのです。

湯の山を愛した文化人や実業家は小菅 剣之助のほかにも数多くいますが、鈴鹿市出身の歌人、佐佐木 信綱（1872～1963）もその一人。三滝川沿いを歩いていると、誘い橋近くの川床に大きな歌碑が建っているのが見えますが、これが「佐佐木信綱の歌碑」。「白雲はそらにうかべり 谷川の 石みな石の おのづからなる」が刻まれています。同歌は信綱が昭和4（1929）年に来遊した際に詠んだ16首のうちの1首で、歌碑は同 37（1962）年に建立されました。

「大石公園」や「佐佐木信綱の歌碑」を眺めた後は帰途に就きますが、その前に少し足を延ばして、俳聖・松尾 芭蕉の句碑がたたずむ三嶽寺に立ち寄るのもよいでしょう。同寺は、僧兵たちが集う山岳宗教の拠点だったことでも知られ、毎年10月には壮大な「僧兵祭り」が行われます。なお、芭蕉句碑に刻まれた句「文月や 六日も常の 夜には似す」は、「奥の細道」の旅の途中、直江津（新潟県）で詠まれました。また近くには、代々織田家や徳川家の御典医を務めた森家の別荘を利用したカフェ「鎮驚庵 山荘」もあります。

涙橋を経由して御在所ロープウエイ「湯の山温泉」駅へ戻るのが今回の散策のルートですが、温泉街の各旅館やホテルに投宿し、ゆっくり過ごしてみてはいかがでしょう。

問 菰野町コミュニティ振興課
TEL 059-391-1160

「佐佐木信綱の歌碑」

芭蕉句碑

カフェ「鎮驚庵 山荘」外観

2024年12月発行〈偶数月15日発行予定〉企画・編集／RON　印刷／株式会社アイブレーン　発行／百五銀行　経営企画部広報SDGs推進室
津市丸之内三―二二

守りたい、いのち

三重県指定希少野生動植物種

絶滅のおそれのある動植物種のうち、特に保護する必要がある種で、
三重県指定希少野生動植物種として指定している野生動植物を紹介します。

マメナシ

被子植物双子葉類バラ科

◆ 分布 ◆

北勢、中勢、南勢

長野、岐阜、愛知、三重各県に分布する落葉高木。丘陵の湿地周辺にごく稀に生育する。湿地の開発、土地造成などにより減少している。和名としては「イヌナシ」を用いる場合もある。

資料・写真提供：三重県　農林水産部　みどり共生推進課　野生生物班

■ お問い合わせ

三重県　農林水産部　みどり共生推進課　野生生物班
TEL：059-224-2578　　メールアドレス：midori@pref.mie.lg.jp

＊三重県指定希少野生動植物種を県ホームページに準じて紹介しています。
＊県ホームページで他の野生動植物種をご覧になれます。

表紙写真　「多文化体験宿 ゲストハウスイロンゴ」（津市白山町）

百五銀行のホームページで、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧いただけます。
https://www.hyakugo.co.jp/mie/

禁無断転載

百五銀行
FRONTIER BANKING

FSC www.fsc.org ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C102819